次の文章を読んで、後の問に答えよ。

教育現場でもデータを集めて分析するためにはＩＴ機器と一体になった情報処理能力が必要とされる。文書作成や統計解析の基本ソフトを操れないと、通常の業務が遂行(ア)しにくくなっているのが現状である。技術という脇役であった「手段」が主役となり、教育という「目的」との関係に倒錯(A)が起こる。手段を知らないかぎり目的がますます達成しにくくなってくるのだ。かくてＩＴ技術に通暁(イ)する者が重きをなすようなケースさえ出てきた。小規模でも多くの組織で、「技術ヘゲモニー(B)」が強くなってきたのである。こうした傾向は、「手段」についての合理的思考にミガき(ウ)をかけることはできるが、何が重要で何が重要でないかの判断力をニブらせる(エ)。教育というものに、物事の重要性の優先順位を伝えるという点で、教える側の「権威」というものが不可欠なことを思うと、こうした技術の優位性を、知性の理性（技術の論理）への屈服(C)と捉えるのは大袈裟(おおげさ)であろうか。

そもそも自然科学的方法(オ)だけでは、考えている問題の意味や重要性を評価できないだけでなく、「人間」や「社会」、あるいは「世界」といった思惟(しい)の対象に関するわれわれの理解が制約・限定されてしまう。その結果、科学・技術の方法は一元論的思考と結びつきやすくなる。自然科学の方法には、一般に次のような大前提が含まれている。すべての真正な問いには、ひとつの、ただひとつの答えがあり、他の答えはすべて誤謬(ごびゅう)である。もし答えがいくつもあるなら、その問い自体が真正ではない。そして正しい答えを獲得する方法は合理的（無矛盾的）であり、正しい答えが妥当する範囲は普遍的、永久的、そしてフエキ(カ)であるという信念だ。この信念と姿勢を徹底させれば、「世界」は合理的に記述可能な「単一のシステム」としてモデル化できるはずだということになる。

一八世紀は、ヨーロッパにおいて科学（いわゆる自然科学）が大勝利を収めた時代であった。とにかく正しい方法さえ発見されれば、人間にとっての外的・内的世界双方の真理はすべて解明されると楽天的(D)に信じられるようになったのである。分野によって方法論に差があるものの、人類が長い間抱き続けてきた問いには、「必ず答えが出せる」という信念に大差はなかった。この合理主義的思考に基づく一元論の浸透こそ、「何が価値を持つのか」そして「複数の価値の間の関係」を伝

えねばならない研究と教育の場に合理主義偏重[キ]の「ゆがみ」をもたらした。「わからないこと」はいずれ必ず「わかるようになる」という確信が支配するようになったのである。

ここで重要なことは、「正しい」問いには「正しい」答えがただひとつだけあるという確信である。正しい答えがひとつだけであるという信念は、自然科学的探究のみならず、人間精神を対象とする科学にもガイトウ[ク]するという姿勢を生んできた。たとえいまわからなくても、いつかは正しい解が必ず明らかになる、と信じる姿勢を、「当然」とみなす者が現代では大多数を占めている。しかし改めて反省すると、これはかなり強い前提であることがわかる。加えるにおそらく学問の世界でも、「世論」から完全に自由で、それ自体いかなる価値判断からも独立した問いと「正しい」答えが得られるのは、公衆からの評価に無関係な高等数学くらいではなかろうか。

しかし、この「正しい答え」[ケ]という発想は、いつしか歴史の発展の正しい諸法則が発見されるという考えにまで浸透していく。人々の考えや、意見、あるいは理論がいかに異なったとしても、その中にひとつだけ正しい答えが存在するのであれば、実際の歴史はその正しい答えに沿って展開するはずだと想定されるようになった。あらゆる問いには、つねに必ず「正しい答え」があるとみなす背景には、このような大胆な前提が隠されているのだ。

そもそも人間の生活の歴史を理解するのに、自然科学の手法をそのまま適用することで事足りるのだろうか。人間の行動とその動機、恐怖、希望、野心、愛と憎しみといった感情を理解することは可能かもしれないが、いかなる時代、いかなる場所にも共通の human nature があるとしても、文化的な経験は時代と場所によって異なる。異なるとすれば、その固有の文化的経験に、それぞれ固有の価値を認めるか否かという問いが必ず立ち現れる。こうした問いを、教育の場で、どのように伝え、議論し、どのように固有の価値を与えればよいのか。これは決して、いかなる物事にも「相対的価値」しか認めないという立場ではない。科学的真理、技術的知識もいくつかの価値理念の中のひとつであり、その価値は、他の価値理念と優劣のために比較考量できるものではない。全体として「善きもの」[E]に奉仕する価値のひとつであるということを学ばねばならないのである。

哲学の復活という形をとったギリシア精神のルネッサンスこそが、ヨーロッパの大学の起源なのだから、いかなる知識が

伝達されていたかということよりも、どのように知識への欲求がカンキ[コ]されてきたのかが重要になるはずである。

専門家集団の層が薄い代わりに、経験豊かな高齢の学校秀才たちが政策決定機構の中枢[サ]にいるというのが、これまでの日本の統治構造のひとつの特色であった。大学もその例外ではない。欧米に比べると老人支配の国だと言われる日本では、なぜ人材配置の「若返り」が難しいのだろうか。この問いに対する答えとして、日本の教育をめぐるひとつの仮説が浮かび上がってくる。日本で「若返り」が難しいのは、老人が要職[F]に居座るということもあるかもしれないが、「若い者に任せておけない」という側面があるのではないか。その理由のひとつは教育内容の差、とくに日本と欧米の古典教育の差にあるのではないか、という仮説である。

この一見「論理の飛躍[G]」とも思える仮説の背後には、次のような推論[H]がある。日本では古典教育がほとんどなされないから、若者の判断力が十分鍛えられていない。したがって、判断力の涵養（かんよう）は主として経験の積み重ねによって行われている。日本では年齢のもたらす知恵と経験に頼ることが重視される。それに対して米国は、いまだ主要大学の学部教育においてはリベラル・アーツの伝統が根強い。政治思想史ならプラトンを読み、マキアヴェッリそのものを論ずる。プラトンやマキアヴェッリの「解説本[I]」でお茶を濁[J]すということはしない。あるいは環境、人権、性といった、きわめてカレントなテーマだけで学生の歓心を買おうともしない。古典教育によって判断力の鍛錬[シ]がなされているのだ。したがってそうした社会では、書かれた人類の知恵を利用できるから、老人の知恵に頼る必要度は低くなる。いかなる社会も「老人の知恵」か「古典の知恵」か、少なくともいずれかを必要としているが、現代の日本社会は「老人の知恵」を、米国社会は「古典の知恵」を、という図式になっているのではなかろうか。

これは少し強引な図式かもしれない。しかし教育というものに力があるとすれば、その実質的源泉がどこかは、社会によって異なることは確かだろう。老人に支配を委ね[ス]なければならない要素が日本の教育体制の中に含まれているとすれば、単に老人支配を批判して済む話ではなくなる。高齢化と古典教育の衰退が、何かにつけ老人に頼る風土を生むという点は検討を要する。

近年、こうした日本における古典教育の欠落を問題視し、「古典を読もう」という運動が広がりつつある。グループで古

典を読む人々から、筆者も読書会への誘いを受けることがある。社会人の研修セミナーであったり、学生の勉強会であったりする。自分が強い関心を持って接してきた本であれば、そうした会には喜んで参加することにしている。その折に、時として議論になるのが「なぜ古典を読むのか」という問いである。

答えは、明らかなようでいて、筋道を立てて理解するのは難しい。今道友信著『ダンテ「神曲」講義』の冒頭に、「古典に学ぶ」という一節があり、次のような見事な説明があるので紹介しておきたい。

「クラシック」という言葉は、ラテン語のクラシクス（classicus）に由来するが、最初から「古典的」という意味があったわけではない。クラシクスは、「艦隊」を意味するクラシス（classis）という名詞の派生語だという。クラシクスは、国家の危機に際して、「艦隊」を寄付できるようなフユウ（セ）な人々を指す形容詞であった（ローマでは、軍艦は税金では造らず、寄付を募って建造した）。人間は私生活においても公的生活においても危機に直面することがあるが、こうした危機に際して、精神の力を与える書物や作品のことをクラシクスと呼ぶようになったのだそうだ。

この例として伊藤博文の古典教養を考えると面白い。現代のわれわれは、伊藤の政治的力量は同世代の中で群を抜いていたことは認めるものの、ともすれば彼を足軽上がりの無教養者、古典教養のひとかけらもない政治家のように思いがちである。しかし伊藤が日露開戦の御前会議の後に漢詩を創って、金子堅太郎に与えて自分の真意を伝え、それに金子が即座に漢詩で応じた場面などは、まさに国家存亡の一大事における古典教養の果たした優雅な役割[K]を示すエピソードではなかろうか。

古典を読むのは薬を飲むようなものだという説がある。そして古典は、現代医学が用いる即効性ある薬剤なのか、それとも徐々にゆっくりと効き目を示す漢方薬のようなものなのかという「論争」もある。しかしこの喩（たと）えは、われわれがすでに病に侵されているという前提に立っている。人間は、その不健康さから抜け出るために「古典」という薬に頼らねばならないということになる。何か薬物依存のイメージが強くなり、われわれの精神の不健康さを診断されたような少し憂鬱な気分になる。

筆者はむしろ、書物は一般に精神の食べ物だと考える。主食・副食・デザート・お酒など、人間はさまざまの食べ物を口にしている。書物も、気軽に読むもの、時間をかけて読むもの、毎日目を通すものなどいろいろある。その中で古典は、筆

者のイメージでは、栄養豊かなどっしりした食べ物のようなものに思える。口にやさしい甘さはない。調理の要らないインスタント食品でもない。急いで飛び込めば、すぐ差し出されるファストフードのような便利さもない。しかし栄養豊かな食物をわれわれは必要としているのだ。

人間の精神と肉体にとって栄養は大事だ。そしてその栄養を、ゆっくりと味わいながら摂取[L]するということが大切だ。素材そのものの美味さを十二分に生かして、しかし時には自分流に工夫しながら賞味すれば、これほど心と身体にとってよいことはないかもしれない。料理読本のような言い回しになってしまったが、それほど書物と食べ物は似ているということだ。

日本の本屋にはたくさんの「解説本」が並んでいる。古典の「解説本」だけを読んで済ませるのではなく、古典そのものと格闘しながら先人の叡智（えいち）に取り組み、そこから栄養を摂取することが精神にとって大事なのだ。「解説本」は、読者に原典を読んだという錯覚を与えてしまう。『徒然草』[M]の話ではないが、石清水を参拝に行って、山の上までは至らず極楽寺・高良神社辺りで、「石清水とはこの程度のものか」と思って帰ってしまう可能性がある。古典はそのものを読んだほうがよい。そして古典は、われわれに何か根本的な精神力と体力を与えてくれるのだ。

以上、筆者が述べてきたことは、「古典と格闘しながら先人の偉大な知恵を摂取し、理念を持ち、かつ外国とも太刀打ちできるような優れた専門家層を育て上げる」ということに尽きるかもしれない。そうした姿勢を保つことによって、人間は合理的な機械ではなく、憧れを持って初めて「善く生きる」（タ）ことができるのである。これを書生のぶつ理想論[N]のように感じる向きもあるかもしれない。だがこれが単なる書生の議論ではないところに問題がある。

（猪木武徳「産業社会における人文学」より）

問一　「倒錯」[A]の言い換えとして、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。 1

1　矛盾　2　背反　3　逆転　4　変質　5　破綻　6　混乱

問二　「ヘゲモニー」[B]の意味として、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。 2

1 介入権　2 生存権　3 占有権　4 主導権　5 既得権　6 監督権

問三　「屈服」[C]とあるが、これと同じ意味で「服」が用いられている語句を次の中から一つ選べ。 3

1 一服　2 服用　3 服務　4 服飾　5 被服　6 着服

問四　「楽天的に」[D]の意味として、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。 4

1 健気に　2 陽気に　3 明らかに　4 にわかに　5 のんきに　6 なごやかに

問五　「善きもの」[E]とあるが、「善」を用いた四字の熟語として正しいものを次の中から一つ選べ。 5

1 いちにんとうぜん　2 かんぜんちょうあく　3 かんぜんむけつ
4 くうぜんぜつご　5 ぜんにゅうかきょう　6 たいぜんじじゃく

問六　「要職」[F]と同じ意味の語句を次の中から一つ選べ。 6

1 公職　2 天職　3 役職　4 官職　5 重職　6 聖職

問七　「論理の飛躍」[G]を示すことわざとして、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。 7

1 海老で鯛を釣る　2 とらぬ狸（たぬき）の皮算用　3 雀百まで踊り忘れず
4 犬も歩けば棒に当たる　5 風が吹けば桶屋（おけや）が儲かる　6 柳の下にいつもどじょうはいない

問八 「推論」[H]の反対を意味する語句として、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。 8

1 目算　2 直観　3 独断　4 帰納　5 結論　6 想像

問九 「お茶を濁す」[I]の言い換えとして、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。 9

1 横着する　2 言い訳をする　3 関心をそらす
4 台無しにする　5 その場を取り繕う　6 分かりやすくする

問十 「歓心を買おう」[J]とあるが、「歓心を買う」の意味として最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。 10

1 同意する　2 注目される　3 満足する　4 歓迎される　5 機嫌を取る　6 興味を引く

問十一 「古典教養の果たした優雅な役割」[K]とあるが、これと同じ用法で「の」を用いているものを次の中から一つ選べ。 11

1 母の好きな花を贈る　2 私が欲しかったのはこれだ　3 社会人の研修セミナーに参加した
4 わが国の未来を憂う　5 行ったものの会えなかった　6 素材そのものの美味しさを活かす

問十二 「摂取」[L]の反対を意味する語句として、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。 12

1 出生　2 出来　3 出荷　4 放出　5 流出　6 排出

問十三 『徒然草』[M]の作者とされているのは誰か。次の中から一つ選べ。 13

1 紀貫之　2 鴨長明　3 在原業平　4 兼好法師　5 菅原道真　6 清少納言

問十四 「書生のぶつ理想論」[N]とあるが、ここでの「ぶつ」と同じ意味で用いられているものを次の中から一つ選べ。 14

1 一席ぶつ　2 石をぶつ　3 畑をぶつ　4 膝をぶつ　5 博打をぶつ　6 魚のぶつ切り

問十五　本文の内容に合致するものを、次の中から二つ選べ。 15

1 合理的思考は、物事の重要性の優先順位をわたしたちに伝える。
2 合理的思考は、公衆からの評価に無関係な、正しい答えを提供する。
3 合理的思考は、「世界」を「単一のシステム」としてモデル化できるとみなす。
4 米国の主要大学は、リベラル・アーツの伝統にもとづいて古典教育を重視している。
5 米国の主要大学は、リベラル・アーツの伝統にもとづいて教える側の権威を重視している。
6 米国の主要大学は、リベラル・アーツの伝統にもとづいて自然科学的方法を批判的にとらえている。

問十六　「遂行」ア・「通暁」イ・「偏重」キ・「中枢」サ・「鍛錬」シ・「委ね」ス の読みをひらがなでしるせ。 16

問十七　「ミガき」ウ・「ニブらせる」エ・「フエキ」カ・「ガイトウ」ク・「カンキ」コ・「フユウ」セ を漢字でしるせ。 17

問十八　「「正しい答え」という発想」ケ とあるが、この発想は何をもたらすと筆者は考えているか。それを示している部分を文中よりそのまま抜き出してしるせ。（十七字） 18

問十九　「調理の要らないインスタント食品」ソ は何をたとえたものか。それを示している部分を文中よりそのまま抜き出してしるせ。（八字） 19

問二十　「自然科学的方法」オ とあるが、これに対して人間精神を対象とする科学ではどのような立場を取るべきだと筆者

は考えているか。文中の語句を用いて説明せよ。（六十字以内） 20

問二十一 「これが単なる書生の議論ではないところに問題がある」[タ]とあるが、どういうことか。文中の語句を用いて説明せよ。（六十字以内） 21

国　語

問	解答
問一	③
問二	④
問三	③
問四	⑤
問五	②
問六	⑤
問七	⑤
問八	②
問九	⑤
問十	⑤
問十一	①
問十二	⑥
問十三	④
問十四	①
問十五	③
	④

問		解答
問十六	ア	すいこう
	イ	つうぎょう
	キ	へんちょう
	サ	ちゅうすう
	シ	たんれん
	ス	ゆだ
問十七	ウ	磨
	エ	鈍
	カ	不易
	ク	該当
	コ	喚起
	セ	富裕
問十八		合理主義的思考に基づく一元論の浸透
問十九		古典の「解説本」
問二十		異なる文化的経験に固有の価値を認め、それぞれが「善きもの」に奉仕する価値のひとつであることを学ぼうとする立場。
問二十一		現実に日本における古典教育の欠落が、合理主義偏重や若者の判断力の低下を招き、老人支配の構造を強めかねないということ。